

藝術とは絶対に職業になり得ないものなので有ります。職業となつた瞬間にそれは藝術でなくなる性質のものなので有ります。それは丁度戀をすると言ふことが職業になり得ないのと全然同じことなので有ります。即ち藝術家とはトルストイの「イワンの莫迦」で言ふ掌の柔かい人間の一人なので有ります。それは唯だ他人の食卓に餘り物が有つた時にのみ食ふことの出来る人間なので有ります。

我等いかに生く可きか。

我等にかい生可きか

「我等いかに生く可きか」と言ふ題で有りますが、しかし元來これは私一個の問題で有りました。唯今私は一體自分はどうか生きたら好いのか自分で分らない。その爲に大變迷つて居ります。そして、さう言ふ迷ひが私の生活の中心になつて居る。或はその全部になつて居る。唯今申し上げますのはつまり其の私の現在の心持なので有りますからこれは本來「我いかに生く可きか」とす可き性質のものなので有ります。それを故らに「我等」と複數に致しましたのはどう言ふわけかと申しますと、つまり若しもこの迷ひが永久に私一個の迷ひとして、永久に私一個の問題として止まるもので有りましたら私は決して斯うして諸君の前などに立つ必要は無いので有ります。山へ通れるか或は市へ隠れるかして永久に一人で考へ込んで居れば好いので有ります。だからして斯うしてここへ立ちましたのが已に私が問題を「我いかに生く可きか」で無くて「我等いかに生く可きか」と考へて居る、或はさう感じて居る何よりの證據で有りまして、同時にさう言ふ心持が直ぐにまた現在私に創作の筆を執らして居る唯一の動機に他ならないので有ります。

「先づ私は斯う言ふ風に考へるので有ります。第一に我我は早晚死ぬもので有る。即ち我我の生涯はもうちやんと勘定の出来て居るもので有つて、我我が斯うして生きて居ると言ふことは實は丁度險しい阪を加速度で轉がり落ちる石のやうに唯だ刻刻なにか自分以外の力で死の方へ逐ひやられて居ると言ふことに他ならない。つまりユウゴオの申しました通り總ての人類は残らず死刑の宣告を受けて居て唯だその執行猶豫の中に生きて居るに過ぎない。しかもその執行猶豫たるやいつ突然しまひになるか知れない所の怖ろしい執行猶豫で有る。所が實は我我は多くこの一番大きな我我の事實を忘れて居るやうで有ります。つまり大抵の場合我我は自分が死ぬと言ふことを忘れて居る。總じて此の自分が早晚死ぬものだと言ふ事實を知ることが人間以外には餘り無い事實で有りましてその他の獸類などは死を怖れる本能は持つて居るが死を知る意識は持つて居ない様で有る。だから若し人間が進化論で申します通り獸から進化したものだとしますと斯うして我我が自分の死を忘れる心持は或は先祖の獸類から受け繼いだ一つの遺産かも知れないと思ふので有りますが、とにかく我我は多くの場合自分の死ぬことを忘れて居るので有ります。或は *man is mortal* と言ふやうな具合に知識の方

では知つて居りまして併しそれをしつかりと意識し把握して居ると言ふ事は非常に稀なもので有ります。これは現今まだ生きて居る露西亞の作家にニコライ・エウレエノフと言ふ人が有りました。この人は現在の最も進んだ舞臺監督でも有ればまた「露西亞性的罪惡史」と言ふビザンチン時代からロマノフ王朝に至る在らゆる性的な罪惡の研究をした非常に浩瀚な本も出す面白い作家で有りますが、この人の戯曲の中にこの我我の生命を時計の指針を以て現した非常に面白いものが有ります。なるほど我我は不斷は自分の死ぬことを忘れて居るけれども然し目の前へ時計を突きつけられてお前の生きる時間はもうちやんと勘定が出来て居てこの針がここまで来れば死ぬのだぞとはつきり言はれれば我我も思はず悚然として不斷自分の忘れて居た事實を想ひ出すで有りませう。

「次に斯うしてちやんと勘定の出来て居る我我の生涯は決して二度ともうやり替へることの出来ないものだと言ふ事實で有ります。もしも一度述でやり替への出来るもので有りましたら、今は好い加減にごまかして樂な生き方をして置いても述でまた眞面目に本當の生き方を搜してやり替へれば好いので有りますから、我我は非常に樂な氣持で居られるわけで有り

ますけれども、しかし斯うして決してもう二度とやり替へる事の出来ないものと考へることは、何か底の知れない怖ろしさが直ぐにも我我を追つかけて来るやうな氣持がするので有ります。そして我我が一擧手一投足の些細な事柄に手を下さうとする場合にも直ぐに「お前は一體いままさう言ふことをして居て好いのか」と言ふ怖ろしい疑問がどこからか聞こえて来てしつかりと我我の手足を抑へて了ふので有ります。そこで我我はこの我我は早晚死ぬもので有ると言ふ事實及びこの我我の生涯は永久に唯一不二の決してやり替への出来ない或る寧ろ奇蹟的のものだと言ふ二つの事實に迫られて、そこに我我は我我自身に對する或る見えざる、しかしそれは實に千鈞の重さを以て壓する怖ろしい責任を感じ、そこから我我は在らゆるものを擲ち在らゆるものを踏み躪つて唯だ己の生き方を捜さなくてはならない或る何物にも優つて鋭い要求を感じるのので有ります。即ち「我等いかに生く可きか」と言ふ迷ひはそこから出發するので有ります。』^A

併しながら一度振り返つて我我の周圍を顧みると言ふと我我はこの「我等いかに生く可きか」と言ふ迷ひは必ずしも萬人共通の迷ひでは無いと言ふ事實を知るので有ります。例へば

手近の例を取つて我我の職業と言ふやうなものの場合を考へて見ればよく分かるので有ります。普通の場合我我は外から與へられた所の職業に對して少しも迷はずまた大した不安の心も抱かずにそれを受け取つて、それを中心とした生涯の據り所として極くすらすと極く平易に自分の與へられた一生を過して了ふので有ります。出来るならば我我もさうで有りた。さう言ふ多くの人人の態度を見る度に我我はいつも寧ろ羨望に堪へない感に打たれる。しかし我我にはどうしてもさうなれない所の何が有る。と言つて或る人達の言ふやうに直ぐにそれは醉世夢死の生涯だと一口に言つて了ふことは出来ないと思ふので有ります。なぜかと申しますのに、それは自分の生き方をしつかり擱んで少しも迷はずに自分の道を歩いて居る人達は自分の立場から見てもさうも言ふことが出来るで有りませう。しかし今なほ自分の生き方に迷ひそれを捉へることの出来ない人間に取つてはさう言ふ多くの人人の態度はそれはやはり一つの「生き方」として映るので有ります。しかも人類の大部分がさう言ふ生き方をしてそれぞれ自分の一生を過して居る以上、もしやそこには或るさうならざるを得ない、人のまだ氣づかない非常に大きな原因が有るのでは無からうかと言ふ氣持さへするので

有ります。だが、とにかく我我がいま心持の上でさう言ふ人達と完全に一緒になれないのもこれも動かすことの出来ない事實で有ります。

次にはさう言ふのとは丸で違つてもつと他の意味からこの自分の生き方に迷はない人達も有るので有ります。それは普通まへに一度非常に迷ひ抜いた擧句ある確乎たる信念に到達してそしてそこからしつかりと自分の道を歩き出した人達で有りまして、例へば古來多くの宗教家などは皆かう言ふ風の人達で有ります。斯う言ふ種類の人達は現在では餘程少くはなつて居りますけれども、しかし斯う言ふ傾向の人達は今でも可なり澤山有りまして、例へば極く手近の例を取つて見ますと例の武者小路實篤氏が新しき村のバンフレットの中で我我の死ぬと言ふことは神への凱旋と言ふことと有ると言ふ意味のことを言つて居られますが、恐らく斯う言ふ風な人人に取つては一體我我はどう生きたら好いのだらうかと言ふやうな迷ひは無からうと思ふので有ります。有つてもそれは神と言ふ一つの非常に大きな目標を持つた迷ひで有りますからして我我の如く全然生活の目標を失つて了つた人間の迷ひとは根柢に於て異つて居ると思ふので有ります。

悲しいことには我我はこの我我の死を直ぐに神への凱旋と端的に考へることの出来なくなつた人間で有ります。即ち神を失つたと言ふことは同時に完全に生活の目標を失つて了つたと言ふことに他ならないので有ります。つまり斯う言ふいま我我が抱いて居るやうな迷ひを根柢から逐ひ出してしてしつかり生活そのものに對する信念を把握すると言ふことは私の考へでは結局宗教より他には決して途が無い。然るに我我はいま完全に宗教を失つて了つて居る。即ち我我はいま一體どこへ向いて歩いたら好いのか全くその方向を失つて了つたわけです。しかもそれにも關はず我我はなほ生きて居る。完全に方角は失つて了つても我我自身の身中には我我をどこかへ向いて歩かさないでは置かない所の或る非常に強い力を感じて居る。そこで我我はまた厭やでも自分自身の生き方を捜す新しい道に出ないわけに行かないので有ります。そこに我我は我我のこの生存そのものを寧ろ血の出るやうな痛みと感ぜざるを得ない或るものが有ると私は思ふので有ります。

そこでそれでは我我は一體どうして自分の生き方を捜したら好いので有りませうか。第一に我我は古往今來さう言ふ自分の生き方をしつかり把持して歩いた多くの偉人の有るのを知

つて居ります。そして其の迹がそれぞれ立派な「道」となつて残つて居るのを知つて居るの
 で有ります。けれども今の我我はそのどの道にもついて行くことが出来ない。神を失ひ宗教
 を失つた我我は、よしんば如何にそのそれぞれの「道」に心を打たれても、しかし結局それ
 は唯だそれぞれ一つの見方、一つの生き方で有つて、決して直ぐに取つて我我の全部の生き
 方とすることの出来ないものだと言ふことを餘りに好く知つて居るので有ります。つまり今
 我我が非常に深く釋迦の教へに心を牽かれながらしかし決して沙門の生活に身を投じること
 の出来ないのも、また或る時には心から科學の示す所に心を打たれながら併し決して直ぐに
 試験管を執る氣持になれないのも全くその爲に他ならないので有ります。即ちいま我我は決
 して他人の迹について歩くことの出来ない位置に置かれて有るので有ります。他人の考へた
 生き方はよしんばそれが如何に偉大な生き方で有らうとも結局それは他人の生き方で有つて
 決して我我の生き方では無い。それは或る場合には非常に深く我我の心を捉へ我我が自分の
 生き方を捜す非常に大きな参考となる物で有りますけれども併し結局それは永久に唯だ参考
 としてのみ止まる可き物で有つてやはり自分自身の生き方は自分自身で捜すより他に爲方が

無^ん。 Mon verre n'est pas grand, mais je bois dans mon verre. 「自分の盃は小さい、併し自
 分はやはり自分の盃で飲む」と言ふ言葉が有りますが眞にその通りで有つて、よしんばそれ
 は在らゆる人類の中の最も貧しい生き方で有つても、やはり我我は唯だ自分自身の生き方に
 生きるより他に爲方が無いので有ります。

無論かう言ふ風な考へ方は或る意味から申せば非常に高慢な考へ方だとも言へるで有りま
 せう。事實今の我我が如何なる權威にも服することの出来ないのも事實で有ります。例へば
 何千年もの間人間の魂を支配して來た聖書のやうなものを讀んでも我我は決して直ぐに頭か
 らお時儀をして下ふ氣持にはなれない。なるほどその中には今でも我我の心を牽く所も有る
 には有るが併しまた随分下らないと思ふ所も少くない。佛典の場合は多少違ひますが併しそ
 れとても決して完全に今の我我の心を満して呉れはしない。それは我我が佛教そのものを好
 く理解し得ない點も有りませうけれども併し決してそればかりが原因では無い。つまり今の
 我我の心持がさう言ふ風に出來て居るので有ります。更にこれと同じ藝術の方で考へて見ま
 しても全く同じことで有ります。現に或る一部の人達が今でもまだ丸で神さまのやうに考へ

て居るゲエテとかシエクスピアとか言ふ人の作品は私の如きは今迎も退窟で讀むに堪へないと考へて居る一人で有ります。レオナルド・ダ・キンチ、レンブラント・ベエトオベン、又はトルストイ、イブセン、ロダンと言ふやうな人達も正直に言へばどうもそれほど大した物では無いと言ふ氣がするので有ります。ドストイエフスキイ、チエエホフ、或はセザンヌ、ゴッホ、又はアナトオル・フランスと言ふやうな人達の作品には色色な意味で心を牽かれるけれども、併しそれとても決して何も隨喜湯仰するほどのことは無い。日本で藝者の話ばかり書いて居る永井荷風さんなんぞの作品も較べて見れば決して見劣りのするものではない。どうかすると少しこの方が好いやうな氣持のする事も有る。併し決してそれはドストイエフスキイやアナトオル・フランスの作品が好く分らない爲ばかりで無く、今の我々の心持がさう言ふ風に考へさせるので有ります。つまり如何なる偉大なるものと雖も完全にいま我々の心を満して呉れるものは決して無い。そして在らゆる事柄を我々は今一度我々自身で考へ直して見なくてはならない位置に置かれて有るので有ります。

かう言ふ風な考へ方は當然その窮極の所まで行かないでは承知の出来ない性質のもので有

りませう。即ち在來教へられた在らゆる他人の考へた考へ方を疑ひこれを否定し全く新しい道から出發するより他に爲方のないもので有りませう。例へば我々は今「二二が四だ」と思つて居ります。けれども二二は必ずしも四だとは限らないかも知れない。さう言ふ約束をするのが已に一つの誤りで有るかも知れない。またむかし我々は日が東から出ると考へて居た。所が後になつて我々はそれを否定して日が東から出るので無く地球が東へ向つて廻轉するのだと考へ出した。けれどもこれだつて本當はどうだか分からない。日が東から出ると言ふのが嘘で有つたと同じやうにこれだつてやつぱり一つの嘘かも知れない。唯だそれぞれ違つた一つの見方に過ぎないかも知れない。唯だ一つ「眞實」なるものは傲然と東の空に昇る太陽、それから我々が今それを見て居ると言ふ事實、又はその心持で有ります。或はそこにごろごろ二つづつ四つ轉がつて居るところの石ころ、併し決してそれは二二が四で無く唯だごころと、併し或る「眞實」を以つてそこに横つて居るので有ります。むかしマケドニアのアレキサンドル大王は「天に二日なし、地に二王有る可からず」と言つて世界一統の志を立てました。そしてその爲に數の知れない人間が命を失ひ最も大きな人類の歴史

が作られました。しかし今から考へて見ると「天に二日なし」と言ふことと「地に二王有る可からず」と言ふこととの間には實に何等の論理的關係も無いので有ります。それは嗤ふ可き一つの非論理に過ぎない。けれどもまた考へて見れば今世界の社會組織を根本から變へようとして居るマルクスの唯物史觀の説だつてそれと全く同じくらゐの非論理から出發して居るかも知れないので有ります。少くとも今の我我はアレキサンドル大王の世界一統の志に心を牽かれないとはまた別の意味で、しかし結局は全く同じ意味でマルクスの唯物史觀の説にも心を牽かれないので有ります。併しさう言ふ無邪氣な併し非常に大袈裟な考へを抱いたアレキサンドル大王そのもの、そこには今の我我も或る面白さを感じる事が出来る。またマルクスの思想そのものにはそれほど心を打たれなくとも、或はマルクスが齡上の女に戀をしたとか貧乏をして子供の玩具まで差し押へられたとか又は子供が死んでもその棺を買ふことが出来なかつたとか、さう言ふ極くつまらない事實の方に反つて非常に心を牽かれるので有ります。つまりマルクスの思想の方には近づくことが出来なくとも人間としてのマルクスそのものには直ぐその傍まで行くことが出来る。そして反つてそこに或る「眞實」を見出す

ことが出来るので有ります。私の如きは今度の露西亞の大革命などに對しても全く同じやうな感じを抱いて居るもので有ります。無論我我はそれを政府の人達が考へるやうに直ぐに怖ろしい人類の反逆と言ふやうにも考へない代りには又ある一部の人人の考へて居るやうに直ぐに地上の最大の光榮と言ふ風にも考へない。それは寧ろ單なる一つの「事實」として我我の眼に映る。そして其の事實のもつ「眞實」のみが我我の心を捉へるので有ります。革命を生んだ所の思想または喧ましい「新經濟政策」と言ふやうな事柄にはそれほど心を牽かれなくて、それよりもつと遙かに下らない事實の方がずつと我我の心を牽くので有ります。例へば元のツアルスコエ・セロの離宮で元の皇帝が今のレニンの兄さんの死刑宣告書に署名をしたその部屋で後にはレニンが革命の事務を取つて居たなどと言ふ事實、さう言ふ所にこそ我我は或る驚きを感じ、事實の持つ或る「眞實」に心を打たれるので有ります。また會てかう言ふ話しを聞いたことが有りました。御承知の通りデアキンの進化論で我我は生物はだんだん進化して先づ猿になりそれから最後に人間が生れたのだと教へられて居た。ところが佛蘭西のカントンと言ふ學者の説によると一番最後に生れたのは人間で無くて鳥だと言ふこと

で有ります。しかし我我がいま現に目の前に一羽の鳥を眺め鍛を振ふ一人の人間の姿を見て居る時に、ダアキンの考へもカントンの考へも我我の頭の中から消え去つて了ふので有ります。そこには唯だ光のやうに風の中に飛ぶ小鳥の翼、または緒く日に焼けてむくむくと躍動して居る筋肉、或はそれ等の持つところの「眞實」がしつかりと我我の心を捉へるのみで有ります。申せば人間が迹から生れたと言ふ考へも或は鳥が迹から生れたと言ふ考へもそのどちらもが嘘なので有ります。在るものは唯だ「在ること」または「生活して居ること」そのものの持つ「眞實」のみで有ります。

「諸君。この「眞實」こそは我我が我我の生き方を捜す唯一の手懸りに他ならないので有ります。唯だ一つの據り所に他ならないので有ります。そして此の「眞實」こそは在來の宗教も哲學も科學も、即ち在らゆる在來の「思想」が取り逃して居たものに他ならないので有ります。昔の宗教が「本來人間とは」と言ふ時に直ぐにそれは人間と言ふ一つの概念の世界へ這入つて了つて此の生きた一個の人間の持つ「眞實」はその手の下から逃げ出して了ふので有ります。科學者が鳥の氣孔の研究をする時に今現在我我の前で眞つ白の翼を震はしてゐる

一匹の鳥は、或はその鳥そのものの持つ「眞實」は忽ち消えて了ふので有ります。哲學者が「認識」と言ひ「意識一般」と言ひ或は經濟學者が「生産」または「消費」と言ふ言葉を使ふ時にその「意識する人間」または「生産する人間」は一つの概念の世界から見た人間で有りまして、今現在我我が目の前に見て居るところの鼻の曲がつた人間または蒼ざめた顔をした病身らしい人間の持つ「眞實」そのものは忽然としてそれ等の人人の手から滑り抜けて了ふので有ります。

この在らゆる「思想」の網からこぼれ落ちた「眞實」こそは今我我が我我の道を捜す唯一の手がかりなので有ります。言ふまでも無くそれは「在ること」そのものが持つて居るところの「眞實」、または「生活すること」そのことから生れるところの「眞實」で有りまして、そして此の光り輝く多くの「眞實」は必然的に或る一點に集まり、即ち眞に透徹して「我生きたり」と意識して眞に己の生き方を捜して居る人間のなかに其の燃焼の中心を作り、そこで眞に己の道を捜して居る人間の足跡をしつかりと地に印せしめる唯一の力となるので有ります。そしてさう言ふ人人の足跡は必然的に一つの「道」となり、その足跡の

ことを藝術の作品と呼ぶのだと私は考へて居るのであります。だからして「藝術」とはこの足跡が人人の間に残る時に初めて成り立つ言葉で有りまして、本來は唯だこの「眞實」のみを唯一のより所として或る己むを得ざる要求から唯だ一心に自分自身の生き方を捜して居る人間が有るのみで、「藝術」または「藝術家」と言ふやうなものは無いと言つても好いのであります。

芭蕉の終焉のことを記したものの中に次のやうな一節が有ります。

「支考、乙州等、去來に何かささやきければ、去來心得て、病床の機嫌をはからひて申していふ。古來より鴻名の宗師、多く大期に辭世あり。さばかりの名匠の辭世はなかりしやと、世にいふ者もあるべし。あはれ一句を残したまはば、諸門人の望み足ぬべし。師の云、きのふの發句はけふの辭世、今日の發句はあすの辭世、我生涯言捨し句句、一句として辭世ならざるはなし。若しわが辭世は如何にやと問ふ人あらば、此の年頃いひ捨おきし句、何れなりとも、辭世なりと申給はれかし。諸法從本來、常示寂滅相、これは是釋尊の辭世にして、一代の佛教此の二句より外はなし。古池や蛙飛びこむ水の音、此の句に我一

風を興せしより初めて辭世なり。其後百千の句を吐くに此意ならざるはなし。ここをもつて、句句辭世ならざるはなしと申侍るなりと。」

つまりここには常にびたりと死を自分の前に見て、そして唯だ「眞實」のみを唯一の據り所とし、一心に自分の道を捜して歩いた人間の態度をよく見ることが出来ると思ふので有ります。そしてそれ以外に藝術はないと私は考へるので有ります。

發行所

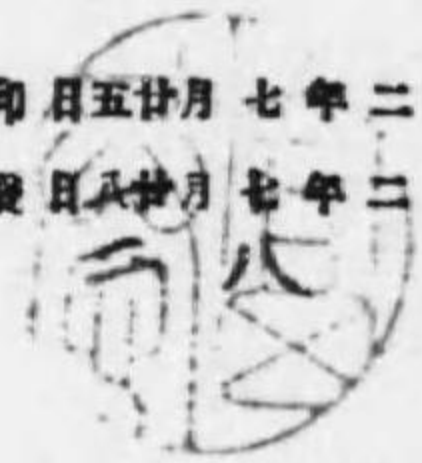
東京橋本區
銀座尾張町

ア
ル
ス

電話
振替
東京
二四八
八八三
番

有 限 公 司

大正二十七年七月廿五日
大正二十七年七月廿五日



著 者 高 倉 輝

發行者 北原鐵雄
東京市銀座區尾張町新地五號

印刷者 山本源太郎
東京市小石川區富久町四十五番地

一 冊 一 圓

我等いかに生く可きか

定價 壹圓貳拾錢

高 倉 輝 著 作 集

第一輯	第二輯	第三輯	第四輯	第五輯	第六輯
女人焚殺 (戯曲集)	海峽の秋 (戯曲集)	蒼空 (長篇小説)	我等いかに生く可きか (感想集)	斯 ^{こしども} して嬰兒 ^{こども} が此の世へ生 ^{たれ} たれ (短篇集)	長谷川一家 (戯曲集)
貳圓八拾錢 送料拾八錢	壹圓貳拾錢 送料拾參錢	壹圓六拾錢 送料拾參錢	壹圓貳拾錢 送料拾參錢	近刊	近刊



吉田屋の
船の
印也。

506

1

終